

文化遺産ニュース

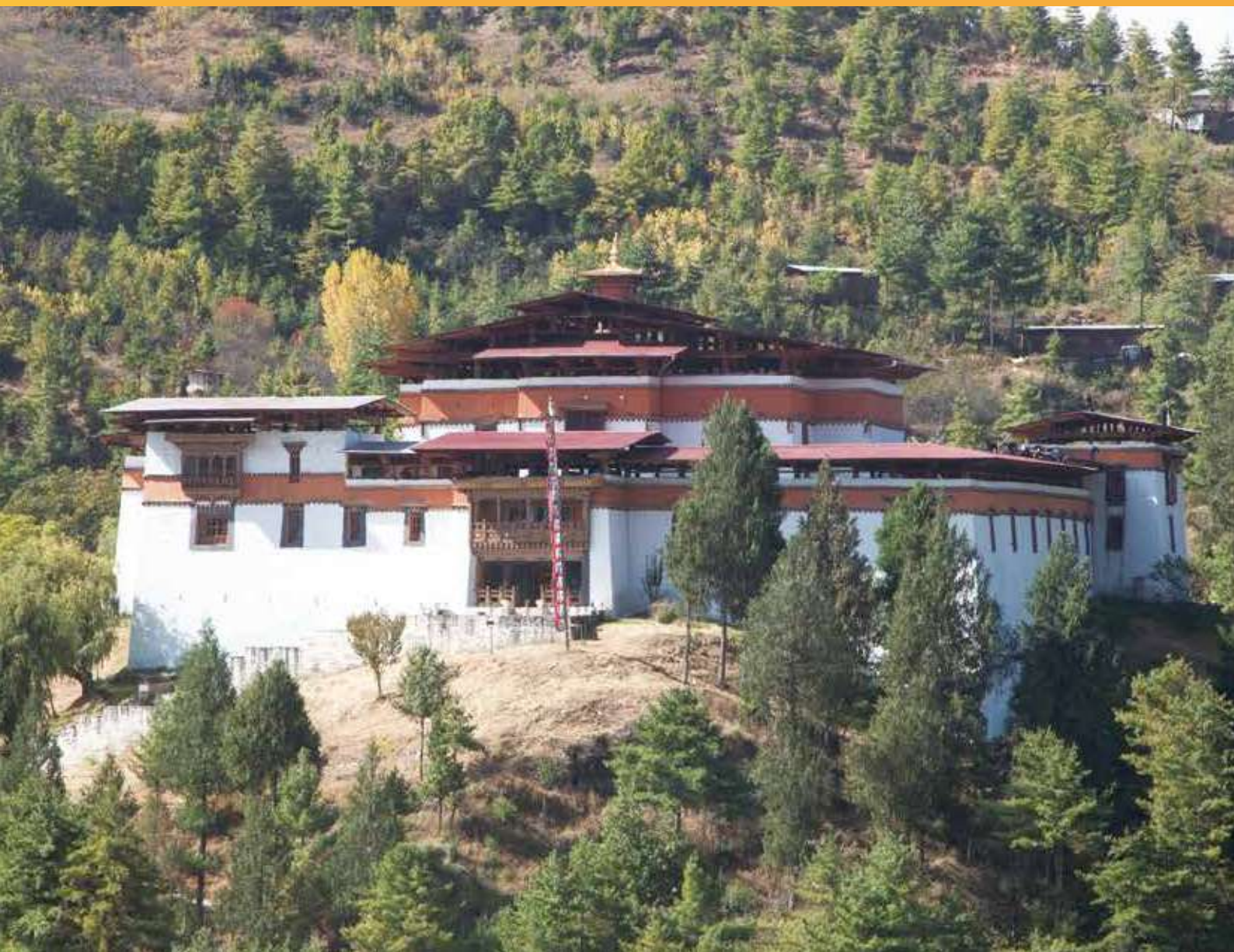
Cultural Heritage News
from NARA

Vol.
28

March 2016

◎ 集団研修	1
◎ 文化遺産ワークショップ(ブータン王国・ティンブー)	2
◎ 個別テーマ研修(モルディブ・ネパール・スリランカ)	3
◎ 国際会議「木造建造物の保存理念を再考するーアジアの木造建造物の価値の所在と真実性概念ー」	4
◎ イクロム総会2015／世界遺産教室	5
◎ 文化遺産国際セミナー「造替の文化と世界遺産」	6

ブータン王国の歴史建造物



集団研修

2015年9月1日から10月1日まで、アジア太平洋地域の15カ国から15名の研修生を招き、「木造建造物の保存と修復」をテーマに実施しました。



臨地研修 金沢城

ACCU奈良事務所の人材養成事業で中核になるのが集団研修です。「遺跡・遺物の調査と保存」と「木造建造物の保存と修復」の2種類の研修テーマを用意して、交互に実施しています。昨2015年は木造建造物の年でした。

15名の研修生は、政府機関・博物館・大学や研究所などで、自国の文化財保護に携わる若者から中堅です。

この研修の大きな特色のひとつは、研修の共催機関で、ローマに本部を置くイクロム（文化財保存修復研究国際センター）から、プログラム冒頭と最後に講師を招き、議論と情報交換を深めていることです。今回もまた、日本だけでなく、アジア地域全体の、あるいは世界的な文化遺産保護の動向を知る絶好の機会になりました。

もちろん、日本が得意とする木造建造物の保存と修復についても、多くを学びました。なかでも、旧田中家住宅（奈



イクロム講師による講義



臨地研修 春日大社

良市五条町)での建物実測実習や、東大寺持仏堂での彩色調査実習では、研修生の多くが、きめ細やかな日本流を初めて体験したといえます。実際に手を動かして図面や調書を作製する実習を多く盛り込んでいる点も、集団研修プログラムの特色になっています。



実測実習 旧田中家住宅



彩色調査実習 東大寺・持仏堂



写真撮影実習 元興寺

カリキュラム(概要)

講義
「アジア太平洋地域の建築文化遺産概論」「文化遺産保存の理念と実際」「日本の文化財保護システム」「日本における木造建造物の評価基準と修理方法」「木製文化財の虫害と対策」など

実習
「木造建造物の記録法(実測・写真)」「破損調査と修理方針の策定」「彩色調査と塗装修理計画」など

臨地研修
(奈良県)東大寺・元興寺・唐招提寺・薬師寺・春日大社など
(他府県)金剛寺観心寺 国立民族学博物館(大阪府)・竹中大工道具館・神戸市北野伝統的建造物群保存地区兵庫県・高山市伝統的建造物群保存地区・白川村荻町伝統的建造物群保存地区(岐阜県)・金沢城(石川県)

報告・討議
研修生自国の「実情と課題」についての報告と意見交換



開講式参加者 国立図書館前にて

文化遺産 ワークショップ

2015年10月26日から31日まで、
ブータン王国の首都ティンプーで実
施しました。

幸せの国ブータンから要請があった研
修のテーマは、「文化遺産の記録写真」
というものです。

ジムゲ・サンポ国民議会議長臨席のも
と、ブータンの伝統的な儀式を織り交
ぜた開講式が行われ、研修は始まりま
した。講師は、奈良文化財研究所写真
室の中村二郎さんと、写真家の杉本和樹
さん。文化財写真の分野で活躍中のお
二人です。受講生は、国内の文化財保
護の一線に立つ20名。内務文化省文化
局傘下の遺産保存課・国立博物館・国
立図書館公文書館などに所属する若者
たちです。



開講式の様子

講義を受けたあと、市内の国立図書館
と郊外のシムトカゾンの二会場に分かれ
て、いよいよ実際の撮影実習です。

国立図書館では、石斧・小金銅仏經
典と版木仏画を教材にして、考古遺物
や美術工芸品の撮影方法を学習しま
した。撮影の前には、現地で容易に調達
できる材料で、撮影台や照明スタンドな
どの用具を製作する、実践的な準備作
業も研修内容に取り入れられました。簡便
な工夫ですぐ役立つと、とても好評で
した。

もうひとつの会場は、ティンプー南郊
のシムトカにあるゾンです。ゾンは、17世
紀からブータン各地に建てられた、城塞・
役所・仏教寺院を包括した大建築です
が、シムトカのゾンは現在、僧侶養成の初
等学校になっています。ここでは、ゾンの
建物全体を教材に、外観から内部まで、
文化財建造物のさまざまな撮影方法を
を学びました。受講生の多くはこれま
で、薄暗い室内の撮影に特に苦労してい
たといいますが、効果的なライティング
と適切なカメラ
操作で、きれいな
記録写真が撮れ
ることを実感し
たようです。

なお、研修の
様子は、ブータン
放送や有力紙ク
エンセルで報じら
れ、地元が寄せ
る関心の高さを
感じました。



講義風景

カリキュラム

講義

「写真撮影の基礎知識」「文化財写真撮影概論」
「考古遺物等の撮影技法概論」「木造建造物の
撮影技法概論」

実習

「考古遺物等の撮影技法」「木造建造物の撮影
技法」「デジタルデータの管理・活用」



写真撮影実習 国立図書館



写真撮影実習 シムトカゾン

個別テーマ 研修

2015年11月10日から12月8日まで、
モルディブ・ネパール・スリランカから
6名(各国2名)の研修生を招き、「博
物館等における文化財の管理と展
示活用」をテーマに実施しました。



臨地研修 東京国立博物館

南アジアのこれら3カ国は、博物館所蔵品の管理や活用の分野で、共通する課題を抱えています。地域博物館の新設や改修という計画に伴い、学芸員の養成が急務なのです。加えてネパールには、昨年の大地震被害からの復興を急ぐ必要もあります。

研修のカリキュラムでは、実際に現場を見て学ぶ臨地研修と、必要な作業を体験する実習に重点を置きました。

国公立の博物館を皮切りに、寺社や民間企業が設立した特色あるテーマ博物館まで、さまざまな現場のバックヤードを訪ねては、業務のノウハウを学ぶ日々の連続でした。あわせて、所蔵品の調査や記録方法、運搬時の梱包テクニック、展示レイアウトの手法などは、見聞きするだけでなく、実際の実技実習でスキルに磨きをかけました。



展示パネル製作実習 檀原考古学研究所

もちろん全てが日本流ですが、研修生は皆それぞれに、自国でもできそうな応用を考え始めているようでした。



拓本実習 奈良文化財研究所



土器復原実習 歴史に憩う檀原市博物館

研修生からのメッセージ



ウメアさん
(モルディブ)

多くの博物館を訪れて、所蔵品をどのように保存し、展示するかという技術について多くを学びました。なかでも展示の方法はたいへん参考になり、自分が働く博物館ですぐにやってみたいことを沢山学びました。



ミミさん
(ネパール)

ご存じのようにネパールでは大きな地震があり、博物館もおおきな被害を受けました。今回の研修では復興に活用できる収蔵庫管理・展示手法などを学ぶことができたので、帰国後にさっそく試みたいと思っています。



スランガさん
(スリランカ)

博物館運営・収蔵品の保存と管理など、さまざまなことを学びました。スリランカでは国立はじめ多くの博物館で改装の計画がありますが、研修成果を活かして新しいアプローチで取り組みたいと思います。

カリキュラム(概要)

講義
「日本の博物館概説(成り立ちから現在まで実情と課題)」

実習
「文化財記録(写真・データ)の実務」「文化財登録管理の実務」「文化財展示活用の実務」など

臨地研修

(奈良県)奈良国立博物館・奈良文化財研究所と平城宮跡資料館・奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・東大寺ミュージアム・興福寺国宝館・木興家斑鳩文化財センター・法隆寺大宝蔵院・唐古鍵ミュージアム・歴史に憩う檀原市博物館(他都府県)東京国立博物館・江戸東京博物館(東京都)国立民族学博物館(大阪府)・竹中大工道具館(兵庫県)・平等院ミュージアム鳳翔館・月桂冠大倉記念館(京都府)

報告・討議
研修生自国の「実情と課題」についての報告と意見交換



会議会場

国際会議

2015年12月15日から17日まで、文化遺産保護に携わる各国の専門家が奈良に集まり、「文化財建造物の保存理念を再考する」をテーマに開催しました。

このテーマの会議は、中国にあるユネスコ・アジア太平洋地域世界遺産研修研究所（上海センター）と連携して、2013年から3か年連続で開催してきました。今回は最終回の会議で、「アジア地域における木造建造物の価値の所在と真実性の概念」がサブテーマです。

歴史的建造物の真実性といえ、1994年に奈良で採択された奈良文書を思い出します。この文書は、真実性の考え方の多様性を確認したもので、以降、アジア地域の木造建造物の世界遺産登録に、大きな可能性を開きました。

ただその一方で、次のような疑問も膨らんできました。

例えば歴史的木造建造物の真実性は、なによりも材料・材質の要素が重要視されています。法隆寺には真実性があるが伊勢神宮にはない、と評価されるのはそのためです。遷宮のたびに全て建て替える神宮を、同じ基準で評価するのは無理な話です。

ですが、建物だけでなく、これも含めた神宮の風景に、あるいは遷宮という行為に（この場合は無形遺産でしょうが）、文化的な価値を見つければとすると、どのようなものなのでしょうか。景観の構成要素のひとつである建物にも、同等に材料の真実性が果たして必要なのでしょうか。それとも、別なもののさしを用意する方が良いでしょうか。

そのような疑問がいま、適切な答えを得られないまま漂流しているのです。



会議の様子

さて今回の会議では、木造建造物の価値の所在と真実性概念の捉え方について、アジア各地域での実情を確認しながら、今後の展望について意見交換を試みました。会議参加者は、ノルウェー・中国・韓国・マレーシア・ネパール・インドネシア・ランカ・日本の8カ国からの専門家19名です。

ノルウェー政府文化遺産局のシュール・メルムさんによる、「木造建造物の保存理念と実務の関係について」の総合的な基調講演ののち、日本・中国・韓国・東南アジア・南アジアでの実情が報告さ

れました。

最後の全体討議では、ひとくくりに木造建造物といっても、なかには、記念碑的な歴史建造物もあれば、現在も生き続けている町並みや集落を構成する建物、あるいは文化的景観の要素の一部になっている建物もあることが、共通の関心事でした。それぞれに尊重すべき真実性の要件は異なるのではないか、というところまで議論は着詰まってきました。具体的な要件の整理作業が次の課題です。



会議参加者



オスティア遺跡

イクロム総会2015



ユネスコ・アジア文化センター
文化遺産保護協力事務所長 西村 康

イクロム第29回総会出席

2015年11月18日(水)から同11月20日(金)までローマで開催された第29回のイクロム総会に参加しました。会場となったFAO(国際連合食糧農業機関)はローマ旧市街地の東端に広がるチルコ・マッシモと呼ばれる古代競技場遺跡の東南隅近くにあり、国連機関のためか、入り口付近には装甲車と自動小銃を持つ兵士がいて警戒をしていました。例年より警戒が厳重なのは、前の週にパリで起きたテロに対応するものと思われまます。

今回はイクロムとACCUN奈良の集団研修を中心とする協力関係が15年目を迎えたこと、ノルウェーに於ける「木のコース」開催が30周年となったことを記念して、両者それぞれに短い発表をする特別な機会を与えられました。どちらも木造建造物の修理をする研修を中心に実績を紹介したのですが、環境や技術、材料が違っても、研修としての取り組み方には大きな差の無いのを興味深く感じました。

オスティア遺跡

帰国する便の出発までの時間を利用して、以前より見学したいと思っていたオスティア遺跡を訪れました。

この遺跡はローマ市内を貫流するテ

ヴェレ川がティレニア海へそそぐ接点となる河口に発達した港町です。長年にわたる土砂の堆積で海岸線はローマ時代より3kmほど沖に移動したため、現在は内陸に位置することになってしまいました。これが港町であった町の衰退した原因でもあります。

遺跡への入り口から真つ直ぐな西へ向かう道を1kmほど歩くと、地割りの違う交差点に出ます。この道を境として西側のブロックと、歩いてきた東側の範囲とは、町並みの出来た時代が違うのでしよう。全体の感じとしては平城宮跡よりは広いようでした。

建物の壁や基礎などの残り具合が非常に良好で、しかも広範囲にあるのです。ごい遺跡だと実感しますが、その割には印象に残らないのは、特徴的な建物がないからかも知れません。とりあえず、ポンペイを見たときのような感激はありませんでした。後で思い出すのは三階建ての貸部屋と思われるアパートのような建物部分と小さめの劇場らしき遺構程度でした。

発見と発掘および修理されたのが古いためでしょうか、すべての建物や塀などの上面がセメントで塗り塞いで雨水が浸透しないように処理がしてあります。見渡す限り例外なく同じような景色が見えるのは、しっかりとした組織による調査や修理が古くより系統的に実施されているらしいことを想像させます。

世界遺産教室

平成27年度は奈良県内10校で開催し、689名の高校生が受講しました。

奈良県内の高校生を対象に実施している世界遺産教室は11年目を迎えました。年を重ねる毎に要望が増し、昨年は10校で開催しました。

講師はフリーアナウンサーの久保美智代さん、通訳の小野以秩子さんです。お二人ともお仕事の傍ら、毎年いくつもの世界遺産を巡り、久保さんはこれまでに約400カ所も訪れたとのこと。



久保美智代さん(二階堂高校)

文化遺産 国際セミナー

平成28年1月9日(土)に、ならまちセンター・市民ホールにおいて、文化遺産国際セミナー「造替の文化と世界遺産」を開催しました。



座談会の様子

伊勢神宮では、平成25年に第62回の式年遷宮が終わり、春日大社では、平成27・28年の両年にわたって、第60次式年造替が行われています。両社ともに20年に一度の儀式を千年以上も続けてきたのです。

はじめは、「春日大社 式年造替の文化を考える」と題した講演で、講師は、春日大社に長年奉職されていた前権宮司の岡本彰夫さんです。儀式を連綿と伝えるための数々の苦勞を、ユーモアを交え、披露くださいました。

続いては、皇學館大学非常勤講師、千種清美さんの「伊勢神宮 式年遷宮の文化を考える」と題した講演です。平成17年の山口祭で開始された第62回の式年遷宮の全容について、ご自身撮影の美しい写真を用いての紹介でした。

指定文化財であるため、現状変更が制約されている春日大社。かたや建物を20年毎に全て一新する伊勢神宮。どちらも造替と遷宮を重ねながら、文化を伝えてきましたが、それには人づくりによる技術の継承が何より大切であることをお二人は熱く語られました。



岡本彰夫さん

講演後は、筑波大学教授の稲葉信子さんをコーディネーターに迎え、三人で座談会「造替の文化と世界遺産」です。冒頭、稲葉さんが、世界遺産登録についての課題や解決策など、複雑な内容をわかりやすく説明くださいました。

その後「造替の文化」の価値や真実性（オーセンティシティ）について、互いに意見を交わしました。

会場の皆さんからは、「国際的な舞台で文化の多様性を理解してもらおうことは、思いのほか難しい。」「長年にわたり神社を守ってきた人材と伝統は大切にしてほしい。」などといった感想が数多く寄せられました。



千種清美さん



稲葉信子さん

「世界遺産教室」では、世界遺産条約の成り立ちや仕組み、その意義などについて、映像やクイズを交えて、楽しみながら学びます。

同時にまた、受講する高校生たちには、現在も戦争や自然災害など危機に直面している世界遺産があること、また戦争や奴隷貿易等に関係する「負の遺産」が存在することについても深く知る機会となります。美術的価値が高い歴史的建造物や美しい自然だけでなく、これら全ての世界遺産が「人類の宝物」であることの意味を学ぶ高校生のみならずは真剣です。

昨年からは、受講生の人数や学年、専攻コースによって、討論の時間を設けるなどの工夫を試みています。これから遺産の保護を担う世代の高校生の皆さんに、さらに積極的に興味を持ってもらいたいと思うからです。受講後には、思っていた以上に面白く、自分も世界を旅してみたくなったという感想が多く寄せられました。



小野以秩子さん(奈良朱雀高校)

ブータン王国の歴史建造物

表紙の写真：シムトカ ゾン



ブータンの歴史建造物には、役所と仏教寺院の機能を兼ねた城塞建築であるゾン、宗教建築のラカン（寺院）・ゴンパ（僧院）・チョルテン（仏塔）、古民家などがあります。

なかでもゾンは、ブータンが誇る代表的な建造物で、通貨ヌルタムの紙幣には各地のゾンの雄姿が描かれています。

目下、国内各地にあるいくつかのゾンを、まとめて世界遺産に登録することを目指し、調査が進められているそうです。



ブータンの紙幣

シムトカ ゾン

首都ティンプー南郊のシムトカの丘陵上に建つこのゾンは、はじめてブータンを統一した高僧ガワン・ナムゲルが最初に築いた由緒あるゾンとして知られています。1629年に着工し、1631年に完成したと伝わります。さほど規模の大きくない地味な建物ですが、後のゾン建築の手本になったといわれています。1953年に廃城になりましたが、1961年からゾンカ語など伝統学問を教える学校に利用され、現在は僧侶養成の初等学校になっています。

（2015年のACCUワークショップでは、ここが会場のひとつになりました。2ページをご覧ください。）



パロ ゾン

ブータンの空の玄関パロ空港を南に望む、市街地東郊の山麓にあります。もとは15世紀に創建された僧院で、17世紀中頃に拡大・再建されてゾンになったようですが、1907年に火災で全焼しました。その後再建されたのが現在の建物です。今もなお、寺院とパロ県庁が同居中です。西方を南流するパロ川には、伝統様式の橋が架かり、これがゾンへの入り口になっています。また、東方背後の尾根上には、望楼であるタ・ゾンも残っており、こちらはパロ国立博物館の一部として利用されています。



公益財団法人
ユネスコ・アジア文化センター
文化遺産保護協力事務所

Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

〒630-8113 奈良市法蓮町 757(奈良県奈良総合庁舎1階)

TEL 0742-20-5001

FAX 0742-20-5701

URL <http://www.nara.accu.or.jp>

E-mail nara@accu.or.jp

交通アクセス

- 近鉄奈良駅から
 - 徒歩約20分
 - バス13番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ

- JR 奈良駅から
 - 徒歩約20分
 - バス西口5番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ